

エクストリームチャレンジ in 四国の右下2013 オープンクラス

優勝チームコメント

チーム・コナ・ウィン 道向 治 さん

エクストリームシリーズ初戦である那珂川大会を、向けられたカメラを意識したが故のM久の軽率な落車や、レース後半必ず姿を現すゾンビ状態のM久のフォローに苦慮したものの、どうにか総合優勝出来てしまった勢いもあってか、今年も年間シリーズ優勝することが出来た。年間シリーズ優勝のご褒美でもある四国の右の下のレースを、僕らTEAM KONA WINはとても楽しみにしている。いや、右の下に行くことがモチベーションになっていると言って過言ではない。M久のお姉さまの嫁ぎ先が徳島空港の近くであり、こともあろうに素敵な旦那様はお家にワインセラーを持ってらっしゃるのだ。昨年のレース前日、初めてお邪魔させて戴いたのだが、その際に...

旦那さま「お酒は飲みますか?飲まれるならレース前ですから軽くビールにしましょうか。」

Kさん「ではレース前なので1杯だけ。」

10分後

旦那様「お酒、お好きなんですね。ワインでも如何ですか?」

Kさん「ア〜、このワインすっごく美味しいですね。」

と言う訳で、夜中まで飲み交わし、翌日のレース開始時には身体が重たかったのは言うまでもない。

そうして今年も、ワインが数本空いた後...

旦那様「明日はレースなので、そろそろ終わりにしますか?」

Kさん「ウ〜ン、まだもう少し。まだ（一本）いけます。」

と言うことで、M久などレース開始時に既にゾンビ化していたのも言うまでもない。

さて、こうした状況の中、慌ただしくレースが始まった。

スタート直後には、恒例のチームチャレンジ。立体のパズルだ。一定時間開示される完成写真をヒントに組み立てるものであるが、僕らチームは完成図をきちんと見ることもせず、独力で完成させようと躍起になって、あーでもない、こーでもないと失敗を繰り返す。みるみる内に周りのチームはパズル完成させスタートしていく。再び完成図を見せて貰い、漸くクリア。後ろには3チーム程度しか残っていない。

CP2までのMTBは、走りやすいオンロードと川沿いの林道。ここまでは、どのチームも迷うことがないであろうコースなので、アップのつもりでペダルを回す。

実は右の下の2週前...Kさんと僕はチームは違ったものの、別のアドベンチャーレースに出場していた。思いのほかの悪天候と峻しいコースで身体はボロボロ、心はズタズタ、指先は凍傷という状態だった。徳島に行ってワインは飲みたいものの、レースには出たくない。ましてや、事前の「全身濡れます」という我部さんからのメールで、一気にやる気が失せた。何せ、凍傷になった指が未だ痺れ、手を洗う時には温水以外考えられない状態なのだ。しかしながら「今回は僕が全て請け負います。」というM久の言葉を信じ、「四国の頃には元気になります。」と言ったKさんのやる気に背中を押され、どうにかスタートラインに立ったというのが実情であった。まっ17年来の友、M久の「今回は僕が全て請け負います。」という言葉を実直に信じてしまったのも、2週間前のレースでのダメージの影響だったかもしれない。今思えば、レース前に気付くべきだった。MTBで仲間を曳く「牽引棒」を今回に限りM久は忘れたという。忘れたにも関わらず、自分のハンドルには時間を掛けて牽引ロープで引っ張って貰う為の治具を括り付けていた。また「今回はパスポートを持ちます。」「水の中に入る際には、自分が行きます。」と豪語していたにも関わらず、何故かパスポートとカードは僕のザックに入っている。

さて、レースに戻ろう。CP2からはMTBで山に入る。CP2、またその先に、幾つかのチームを目視。Kさんと僕に刷り込まれている「何か」がここで蠢き出した。M久がゾンビに変身するがごとく。登りに入ったが、ギアをアップして1チームずつ抜いていく。『おら、おら、負けるか!!』いつの間にか獣と化している自分がいた。3チーム程追い抜いたかどうか、MTBに乗れない急斜面手前でまた数チームが立ち止まっている。進むべきルートを迷っているようだ。僕らは迷いもなく、正しい方向に向かって尾根に取りつく。シダが生い茂り、道は目視で確認できないが、間違いなく山道に出ると確信しての藪漕ぎだ。眼下を見ると、他のチームはまだ決めきれないようだ。暫く進むと目論見通り山道に合流。CP3の鞍部に向かってMTBを担ぎ上げる。鞍部の手前で、エクストリームシリーズ総合2位の加波一族が先行しているのを発見。CP3にMTBを降ろして、KさんのMTBを担ぎに逆走する。この辺りから完全にスイッチが入り、前を捕えようと力が漲ってきた。CP3のポストには、1枚のカードしか投函されていない。この地点でトップは、加波一族。2位に浮上した。CP4まではMTBでの快適な下りと思いきや、ガレていてなかなか思うように乗ることができない。それでも先行する加波一族の距離を少しでも縮めようと無理やり乗るも制動が利かず、側面の岩に肩から激突してしまった。一瞬、動けなくなるような激痛がはした。暫く蹲って痛みを凌ぐ。気を取り直し、先を急ぐが、

背中から腰の辺りに少しねっとりとした感触を覚えた。まさか肩から出血?と恐る恐る手で拭ってみる。間違いなく濡れているが、血ではない。ザックに入れておいた補給用のゼリーが、岩にあたった衝撃で破裂したようだ。乗ることをあきらめ、担いで山を下る。CP4が見えてきたが、手前に草が生い茂って進むべき道が分からない。「えいやっ」と直進したが、斜面が急に落ちていて、MTBもろとも大転倒。ブッシュに絡まって自力で脱出ができない。M久にヘルプをお願いしたが、これまたM久も一緒に転倒。男2人がもんどりうって何やってんだかって感じ。

CP5までは再びMTBでオンロード。CP6からCP8までは、シーカヤックセクション。1人乗りはKさん。2人乗りはM久と僕。いつもと違い、後ろに乗ろうとした僕にM久は怪訝な眼差しを送ってきた。レース後に聞いてみたところ、後ろでこっそり休もうとしていたらしい。つーか、2人乗りのカヤックでは、僕の目が届かない後ろに乗り込み、休むセクションであると勘違いしていたようだ。まったくもってふざけた奴だ。地図を渡し、次のCPの指示を依頼する。先行するKさんに指示を出したいが、M久は前でぶつぶつ言っている。どうやら乗り込んだ位置すら把握できていないようだ。幸い前に行く加波一族が見えるので、その方向を追うように艇を進めた。CP6、CP7を取ってCP8を取る為に岸壁にカヤックを着けた。漸くM久の出番だ。直ぐ後ろを走っていたNICHIAも少し先の岩場にカヤックを着ける。数分経ったがM久が戻る気配はない。僕らが着けた岸壁からはCPは見えない。M久はどうしたのか?とKさんと案じていると、カヤックで仲間を待つNICHIAの一人が仲間に向けて手を振っているではないか。そのとき岩場に足を取られながら、手を振り返し、カヤックに乗り込もうとしている一人の姿が確認できた。M久はまだ戻ってこない…。再びNICHIAの様子を伺うと…、どこかで見たようなTシャツとバンダナを身につけている男がカヤックに乗って待つNICHIAの仲間から乗船拒否を食らっているではないか。なんとM久は、岸壁ではなく岩場に着けたNICHIAのカヤックに愛想よく手を振り返しながら、我先と乗り込もうとしているではないか。カヤック上で地図を読めないばかりか、艇まで間違えるとは…。やはりM久は、人に無い何かを持っていると確信した。怒りに打ち震えながらもKさんと僕は腹を抱えて笑いまくったのは言うまでもない。カヤックの終了地点に戻る途中で、NICHIAに「あのまま仲間をチェンジしてもよかったのに。」と冗談半分気味で言った言葉は、実は本心だ。まっ、フィニッシュ後の宴会のネタがひとつできた気持ちを入れ替える。

カヤック後は、トレッキング。概ねオンロードなので、しっかり走りたい。ましてや、前に行く加波一族、直ぐ後ろにいるNICHIAは男性3人のオープンチーム。競り合ったら厳しい気がした。牽引ロープでKさんを牽き、2つのCPを巡る。Kさんと繋がれている牽引ロープからは、「まだまだイケる」って伝わってくる。振り返るとM久もまだ身体の軸がずれていない。大丈夫。このオンロードで加波一族をかわす。MTBに強い印象があるので、ランで差を広げたい。2つ目のCPでチームチャレンジに手こずるが、クリアし先を急ぐ。次のセクションは今回のレースの2度目の山場、ナビゲーション要素が高いトレッキング。山道への取っつきは簡単だが、一つ目の鞍部にあるCP以降が難しそう。鞍部にあるCPは難なくクリア。このCPのポストには3個くらいの赤色LEDが取り付けられていた。昨年、最終チームが日を越えてしまったため、今回は選手・運営側の負担を軽減するための配慮だろうと思うと少し笑ってしまった。さて僕らは、このまま迷わずに行けば最後のMTBパートに入るまではヘッデンの必要がないであろうと推測し、迅速且つ確実に進むことを皆で確認した。鞍部から北に伸びる尾根はかなりブッシュがひどく、途中には鹿ネットも施され、行く手を阻む。左右に抜け道を探ると、ネットの左が柑橘系の畑になっていることが分かった。ネットを潜り、畑の脇道を上る。次のCPは3角点。先に進んでいた右手の尾根を外さないように進む。尾根線のブッシュが緩くなってきたようなので、再びネットを潜って尾根に戻る。ネットを潜ろうとしたとき驚いたのは、ネットに鹿の頭部の骨が括り付けられていたことだ。田畑にカラスの死骸を括り付け、カラス害を防ぐ方法があるのは聞いたことがあるが、鹿の頭がついているとは。四国、恐るべし。シダ系?ブッシュをかき分け山頂を目指す。三角点にあるCPをゲットし、下りを急ぐ。方角を確認しながら右方向にトラバース。そのうち山道に行き当たった。方角もOK。最後の急斜面を下り切り、出口にあるCPを探すが…見つからない。有人CPなのに人の姿もない。どうやら違う場所に出てしまったようだ。少し焦りが生じたそのとき、満を持してM久がつぶやいた。「地図で現在位置を確認し直そう。」そう、それが基本だった。『やるじゃないかM久。』心の中で快哉する。眼前には畑が広がり、真ん中に古墳のような小山が見える。地図を見ると直ぐに現在位置が確認できた。CPは右手に見える尾根の突端。距離にして300m程か。M久の一言で、ほどなくリカバリー。次のCPの先は、事前告知のあった全身濡れる川中の行軍だ。ライジャケを着けるって、どれだけの水深なのか?意を決して川に入る。水温はそこそこ低い、思った程の水深ではない。ほどなく終了。僕らは明るい内の通過なので事なきを得たが、最後の渡渉箇所には段差があり、暗くなって通過するチームは躓いて全身ずぶ濡れになる可能性もある。フィニッシュ後に我部さんに聞いたところ、試走時には上半身が浸かる程の水量であったとのこと。

このCPを抜けるとラストの海岸と平行して走る松林以外は全てオンロード。2位のチームは目視で確認できないが、力のあるオープンの2チームが間違いなく追ってきているに違いない。オンロードで距離を詰められる可能性が高く、気が抜けない。Kさんを牽引してラストのMTBセクションまでスピードを上げるが、ここにきてM久の動きがおかしい。身体がぶれ、遅れ始めた。CPまでのラストの坂でかなり離れてきたので、余裕のあるKさんの牽引をいったん止め、M久を牽くために逆走した。ところが牽引されたり、後ろから押しもらう姿を人に見られることを嫌がる嫌いがあり、今回も牽引を拒否する。本来、チーム戦であるアドベンチャーレースは、力がある者が弱きを助け、チーム力を高め進んでいくものであるが、如何せんプライド(彼は高校ラグビーで全国制覇をしたり、中学陸上で日本ランカーになった実績を持っている凄いアスリートなのだ)が高いのか、無意識にか、こうした行動をとる場合がある。後方のオープン2チームが差を縮めてきていることが予測され、少しでも先を急ぎたい気持ちでいっぱいなのだが、こうなるとは仕方がない。無理矢理牽いてやる気をそぐより、彼にギリギリの力を出させることの方が賢明と判断する。ここにきて気持ちが少しざわつくが、我慢我慢。これもアドベンチャーレースなのだ。CP直前でかなり薄暗くなってきた。ラストのMTBセクションで口をしないよう、CPに着いたらヘッデンを装着しようと確認する。補給を取り、ヘッデンを装着し、地図を頭に叩き込んでMTBに跨る。CPを出発して1K程度進んだところで、NICHIAとすれ違う。思った以上に追い上げられているようだ。彼らは、まだ余裕のある顔をしている。次のCPまで時間指定があるものの、今の体力をすると全

力で丁度到着くらいと判断する。CPまで行ってから時間調整しようと思っ統一し、暗くなった国道をひた走る。バイクになれば気分も変わり、M久の調子も上向いて欲しいと考えていたが、脚が攣り出したようでスピードが上がらない。どうにか2番手を走るKさんに喰らいつこうと必死にもがいている状態。普段より多く声掛けをして、彼の気持ちを切らさないよう間接的に背中を押す。国道を折れ、次ぎのCPまであと僅か。電燈の無い川沿いの道で、後方に迫っているであるいNICHIAのヘッドンが見えてこないか確認したが、まだ大丈夫。暫くして、松林の中にCPを発見。時間指定にあと1分。手前で止まり余裕を持って1分15秒を数えた後でCPでチェック。指定された時間通りにCPに到着出来たということは、ひとつ前のCPでのタイム差はそのままであるということだ。少なく見積もっても10分程度の余裕はあると踏む。間違いないように松林に設置された10文字を探す。以前、トレッキングの際の鞍部にあった赤色LEDに触れたが、なんと松林に設置された文字にも全て赤色のLEDが点滅している。暗闇の中に点滅する赤いライト。間違いようがない設定。とは言え、M久の体力と絶対ミスを起こさないというスピードを意識し、2人を前に先行させる。最後のCPにカードを投函し、後はFINISHに向かうだけ。前方に「まぜのおか」の温水プールが見えているものの、僕のミスでひとつ左手の道に入ってしまう。プールの光が目視できなくなったところで、犬を散歩する人と遭遇、「まぜのおか」を確認する。再度CPに引き返し、正しい道に乗り直す。自分のミスは形で返そうと、最後の坂を2人交互に牽引する。まぜのおかの門を通過し、FINISH LINEであるイルミネーションの光の中に3人に入った。いつもの3人での総合優勝。前日までは、レースへの参加さえ危惧していた状況にも関わらずの優勝。手放して嬉しかった。が、レース展開?もいつもと変わらないTEAM KONA WINであった。

『チーム編成時からレース終了までがアドベンチャーレースだ』とよく言われる。その通りであると思っているが、今回はフィニッシュライン通過後もまだまだアドベンチャーレースは続いていた...

前述のとおり「今回は僕が全て請け負います。」と言い放ったM久だが、レース中にゾンビになりきら(なりきれ)なかったことが災いしたのか、フィニッシュ後にスタッフの方が用意して下さった美味しい豚汁を前にゾンビ化。管理棟で宿泊コテージの鍵を受け取り、部屋の電気を点け、炊事棟に戻ると無表情のゾンビが1匹。先に帰って休むというゾンビに部屋の鍵を渡し、漸く豚汁を頂いた。美味しい。お代わりまで載いてMTBでコテージに戻る道すがら、蝸牛の速さでMTBを曳くゾンビに出くわした。再び鍵を回収し、風呂を入れ、食事を作り、ベッドメイキングを施し、料理とお酒をテーブルに並び終えたところで、元気なM久が復活した。『チーム戦であるアドベンチャーレースは、力がある者が弱きを助け、チーム力を高め進んでいくもの』...「本当にお前にプライドってあるのか?」言葉に出さないまでもKさんと僕は顔を見合わせ同じ疑問を頭に浮かべた。

M久のプライドの有無については、また来年確認したいと思っている。